

編集 樋口 みな子

E-mail
 minginga@agate.plala.
 or.jp
 郵便振替
 「銀河通信」02740-7-
 56535

(6号分1,000円)



おかげさまで「銀河通信」が17周年を迎えました

18周年に向かって!

「銀河通信」が今年7月、おかげさまで17周年を迎えました。134号になります。7月23日は私の誕生日とも重なり、ささやかに自分をほめてあげたい気持ちでいっぱいです。

今年は1月から格別忙しい半年でした。日本山岳会の全国一斉の分水嶺踏査があり、いままで泊りがけの山になどほとんど行ったことがないのに、クオベツ山、清風山にはじまり、パンケ、パンケ山、イソサンヌプリとずいぶん遠い山の分水嶺を歩きました。家族は最初はとまどい、あきれたり、危険ではないのかと心配したり、とさまざまな反応がありましたが、日常生活をきちんとこなすことを条件に、やっと私の登山が認知されたようです。

銀河通信は現在、240人に発送しています。山の話など関心がないという方もいらっしゃるかもしれません。1年以上連絡のない読者は、発送を中止したいと思えます。葉書かfax、またはメールでお知らせください。240人も読者は嬉しい反面、拙い文章を恥ずかしく思えます。それでもおひとりおひとりのお顔を思い浮かべながら、通信を発送しています。切手もそうです。毎回、季節にあった記念切手を貼るようにしています。合理的ではありませんが、気持ちが伝わるような気がするのです。山岳会の方で、札幌中央郵便局長さんがいらっしゃいます。ご自分でためていらした貴重な記念切手をたくさん寄贈していただきました。大きな励ましになりました。

また18年に向かって歩み出します。健康である限り、心に残ったさまざま事を伝えていきたいと思えます。めざせ150号!です。これからもご愛読いただけたら嬉しく思えます。

(みな子)

相田みつを美術館 Mitsuo Aida Museum



7月22日東京・有楽町国際フォーラムで「相田みつを展」を見ました。

田園風景に溶け込んで

7月22日から24日までの3日間お世話になった水海道の前島さん宅は、のどかな田園風景の中に溶け込んでいました。野菜もたくさん植えてある平屋の大きな家でした。



「いのちいっぱい
じぶんの花を」

福島からは、梨園を営む阿部一子さんもいらして、ご主人を夜勤に追いやって、近所の方も含めて女4人で、美味しい料理とお酒と話で、楽しい時間を過ごしました。



安全登山・盗掘防止研修会に参加しました

6月4日～5日、様似のアポイ岳調査研究支援センターで、アポイ岳ファンクラブの研修会と北海道高山植物盗掘防止ネットワークのキャンペーンがあり、ユウパリコザクラの会との交流登山に参加しました。

日本山岳会北海道支部の事務局長である長谷川雄助さんが「中高年の山の楽しみ方」と題する講演をしました。前職時代、山岳遭難救助隊での若くして遭難死した人たちに接した時の無念の思いを語り、安全に楽しく山に登るためには、どんな注意が必要であるかについて話されました。最近の遭難の統計から、50代、60代の遭難が圧倒的に多いこと。事故の大半が下りで起きていること。自分の体力を知ることが大事と語りました。

NHK登山教室の講師としての経験から、集団登山ではメンバーの体力に目配りして、ペース配分を考慮することと話し、山では若い頃の自慢話や、孫の話はしないでと参加者を笑わせながら、山の雰囲気をも十分に味わって欲しいと結びました。

岨山自然保護協議会会長の山岡桂司さんが「岨山入山制限の6年を経て」と題して講演しました。キリギシソウなど28種もの高山植物が盗掘などで絶滅の危機に瀕しており、1999年から全国でも初めての入山規制を行い、植生の回復を図ってきたこと、高山植物が回復してきた



エゾキスミレ

こと、もうしばらくは、規制したいと話されました。それでもゲートの鍵を壊してまで入山する人もいることなど、マナーの悪さも指摘しました。

アポイ岳ファンクラブのメンバーによる手作りの料理が並びファンクラブとユウパリコザクラの会の交流会で活動の交換をしながら夜も更けていきました。

5日は、ピンネシリ～吉田山～アポイ岳の縦走です。私は初めての参加です。

登山口から、トドマツ、ダケカンバのつづら折りの道を進む

と今度はハイマツの海。やがて稜線に出るとエゾキスミレ、エゾオオサクラソウ、ユキワリコザクラなどたくさんの花たちが迎えてくれました。野趣にあふれ、ここからの日高山脈南部の山々の展望が素晴らしかったです。縦走路は人が少なくお勧めです。アポイ岳山頂は、一転してたくさんの登山者でにぎわっていました。支援センターではそうめんと採りたてのいちごが用意されていました。アポイファンクラブのいつもながらの温かいもてなしに感謝！

アポイ岳ファンクラブや、様似町のアポイ岳の高山植物を守っていききたいとの思いが、現場にくるとより強く実感できました。(み)

札幌岳と空沼岳縦走路の笹刈りに参加して

札幌や近郊の市民に親しまれている空沼岳。登山者の安全を守っている万計山荘の管理人の小笠原実孝さんのよびかけで、7月4日に札幌岳と空沼岳の縦走路の笹刈りを有志9人で行いました。

豊滝の登山口に7時半に集合。男性は大きな笹刈り機を背負い、私は、4リットルのドラム缶に入ったガソリンを背負っての登り、汗がふき出しました。札幌岳の稜線に出たのが9時。それからさらに進み、笹が背丈を越えているところから、頂上近くまでの2、1kmの笹を刈っていくのです。3つのグループに分かれて作業しました。笹刈り機のそばは危険なので、私や女性陣は少し離れたところで待機して、刈り終えた笹を脇によけて行くのです。ガソリンは笹刈り機に使います。笹刈り機の操作はこつがいます。どのチームも真剣に力強く笹を刈って行きました。3つの班で1、5kmの笹刈りを終わりました。雨が降り出しましたが、雨具を着ての作業は2時半まで続けました。

5時下山。山の道はこうしたボランティアの努力があって、快適な登山が出来ることを改めて実感でき、爽快感と達成感を味わいました。

小笠原さんは、残りの笹刈りを翌日、雨の中で、ふたりでやり遂げ、2、1kmの縦走路がつながりました。本当にご苦労さま。(み)

未来の子どもたちに残そう 清流サンル川とサクラマス

フォーラム・天塩川流域の環境を考える サンルダム「功罪」を4氏が検討



左から、蝦名、宮田、佐々木、稗田の各氏＝6月18日、北大で

は期待できない。ダムよりも堤防整備と、遊水地で効果的な治水をすべきだ」と発言しました。

フォーラムでは、川、ダム、町、海の4つの視点から4氏が発言しました。

北海道自然保護協会の稗田一俊さんは、昨年の台風で決壊の危機に瀕した二風谷ダムの現場に居合わせ、ダムがならんら洪水防止に役立たなかったことをスライドを使って証言しました。サケの生態を長年記録し続けてきた稗田さんは「川はサケやサクラマスが生命を育む場」であること、ダムが川の環境を破壊し続けている実態を浮き彫りにしました。

自然・文化ネットワークの佐々木聡さんはダムの問題点を指摘、下川自然を考える会の宮田修さんは釣ったサクラマスを手にもつて「サンル川は堤防もダムもほとんどない自然河川。産卵できる清流サンル川を守って」と訴えました。

北の多い漁協専務理事の蝦名修さんは、全国的に有名な天塩シジミの水揚げがこの20年で最盛期の7分の

1の380トに激減し、「天塩川流域の河川環境がこれ以上悪化しては漁業者にとって死活問題」と発言しました。

6月11日には水没予定地の見学会が行われ、宮田さんが「サクラマスの産卵地です」と説明すると、参加者から「素晴らしい川ですね」「こんな自然河川はあまりないから貴重です」の声が上がりました。私も取材しながら、子どもの頃遊ん

だ沙流川を思い出していました。

「未来の子どもたちにサンル川とサクラマスを残そう」の声を大きくして行きたいです。

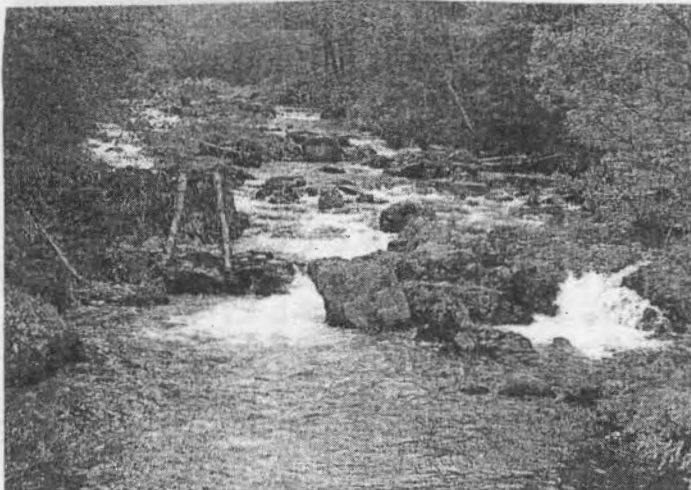
（北海道の森と川を語る会）

北海道の森と川を語る会（代表）小野有五・北大教授が6月18日、北大芸術交流会館でフォーラム「天塩川流域の環境を考える」を開き、市民、自然保護グループ、漁業関係者ら120人が参加しました。

樋口みな子

水などの利水を目的とした多目的ダムで、総事業費は530億円。自然環境への影響が大きいと反対する人々の声を押し切って1993年に着工されました。水没予定地の農家13戸は全て移転を終え、水没する道路約12kmの付け替え工事が進んでいます。

小野代表は「住民にサンルダムがどういう計画か知らされていない。サンルダムの集水域は、天塩川全流域のわずか3割で治水効果



良好な自然が保持されている天塩川支流サンル川＝6月11日、下川町

交流会ではヤマベやウドのテンプラ。ギョウジョニンゴのふかしとサンル川や川沿いで採れた魚や山菜の料理のとてもおいしかったです。6月12日、雨の中、小野先生、佐藤謙先生と天塩川水車と宮田さんの案内で見学しました。川の達人で魚の泳いでいるのが肉眼で見ると、大事な財産だと思いませんかと感じました。

下川自然を語る会の宮田さんは町職員、種成(72)の立場をとり町は対して、いまだ清流サンル川は北海道の貴重な財産です。たまたまの声を集めて声を止めたいです。(7)

遥かなる山、芦別岳

7月17日、三野さんのお誘いで、某山の会の女性、Iさん、Oさんの4人で、芦別岳の旧道から登り、新道へと降りました。

我が家の居間には、坂本直行さんが描いた芦別岳が飾られていて、天を衝く鋭い岩峰がいつも気になっていました。いつか、いつかと思っていましたが、思いがけなく、快晴のととてもいい条件で登ることができました。

16日夕方に山部自然公園にテントを設営。翌朝、3時に起床して旧道登山口まで歩き4時半に出発しました。



IさんとOさんは50代の女性ですが、芦別岳は3度目だそうで、地図がしっかり頭の中に入っています。ユーフレ川左岸沿いに進みますが、大きな高巻きをしなければなりません。二人は、息もきらさず、淡々と登っていき圧倒されました。たくさんの経験をつむことの大事さを知りました。川のせせらぎが気持ちよく、安らぎました。不動の滝、三段の滝がダイナミック。しばしの涼になり快適でした。夫婦沢を巻いての急斜面が厳しく、

北尾根に出た時はほっとしました。高山植物が次々に現れて、励まされるように登りました。ハクサンチドリ、キジムシロ、アズマギク、イワギキョウ、ムシトリスミレ、エゾルリソウ、オオタカネイバラ、エゾイソツツジ等。春のシラネア

オイも咲いていました。雪解けが遅く、春と夏の花が一緒に咲いたようです。

沢あり岩あり、お花畑ありの野趣と変化に富んでいて、楽しめました。ハイマツ帯は、背丈ほどもあり登山道をふさいでいて、ガスったら迷いそうでした。

「こんなにすっきり見える芦別岳はないよ」とIさん。美しく屹立した芦別岳の雄姿をデジカメに納めました。ライオンの背中のような嵯山も眺望できました。

50代の私たち、お花畑の中で少しは美しく見えるかなと女性3人でも写してもらいました。写真を撮ったり、花をめでたりとゆっくりのペースで8時間で芦別岳頂上に。12時半でした。山頂には、5組ぐらいのパーティがランチタイムをとりながら、展望を楽しんでいました。私たちが着いた時には、雲の中で残念でしたが、登る道すがらマッターホルンのような芦別岳を間近に見ることができ嬉しかったです。帰りは単調な新道をひたすらに3時間20分で国道に出ました。16時20分でした。(み)



小さなコンサート

7月15日夕方から、20人程度のなんともあったかなコンサートがありました。

場所は北大近くのフェアトレード雑貨&レストラン「みんたる」です。モンゴルの馬頭琴とホー

ミンの嵯峨治彦さん、語りの田中孝子さん、南米のフォルクローレを岡田浩安さんがサンポーニャとギターで、吉田ユウ子さんの唄で楽しみました。モンゴルの草原を思い浮かべながら馬頭琴を聴きました。宮沢賢治の「双子の星」の語りがとても素敵でした。唄と管と弦が紡ぐ暖かい音楽に心やすらぐひとときでした。

「みんたる」は、さまざまな活動をしている人たちの溜まり場です。是非、足をのぼしてみてください。

北14条西3丁目で和田みかよさんがひとりで行っている、小さなお店です。



アイヌ語地名からアイヌ文化を学ぶ

道新文化センターで4月から3ヶ月間アイヌ語を学んできました。

その最終回、特別講座で「アイヌ語地名を訪ねる会」が6月25日に開かれ講座受講生など16人が、参加しました。

案内をしてくださった太田満先生は、空知アイヌ語教室を主宰して、石狩川流域のアイヌ語の研究をされているアイヌ民族です。

石狩浜、厚田、浜益村、新十津川と石狩川の下流域を訪ねました。石狩川流域にはいくつもの小集団があったそうです。カムイコタンより上流に住むペニウングル (Peniunkur)、それより下流の深川、滝川あたりを中心に中流域に住んだパニウングル (Paniunnkur)、河口のあたりに住んだパラトウングル (Paratounkur) です。小集団ごとに習慣や言葉が少しずつ違うものの、歴史的にも、アイヌの意識としても、この川筋で話されてきた言葉を「石狩方言」と呼ぶのが正しいと言います。

アイヌ語地名は漢字で当て字しているので本来の意味がわからなくなっています。日本語と、アイヌ語表記をしてもらえたら、よりアイヌ語が身近になるのと思います。江戸時代のアイヌ語通訳、上原熊次郎氏の地名考に「イシカリとは即、塞がる、または、詰まるという意で、この川筋屈曲して塞がり身ゆ

る故この名ありという」とあります。聚富 (シュップ) は石狩市と厚田村の境界をなす聚富川に由来する地名でありアイヌ語で Soup 「箱」の意味といます。望来 (モウライ) は Moray 「流れが遅い川」の意味があると知りました。生活と密接したアイヌ語の由来に、とても知的な民族であることが理解できました。

石狩浜で、太田先生がカムイノミを行いました。カムイノミを行える数少ない若い世代です。石狩の川筋に住む人たちが幸せになるようにと祈り、ハンノキのイノウヤ、食べ物を捧げました。浜益村の郷土資料館でのユカラの語り、浜益神社での無縁仏や、非業の死をとげた人々へのカムイノミなど万物一切に対する敬虔な祈りに、私も心が洗われる思いがしました。

山の地名はとおたずねすると、川に由来したものがほとんどだそうです。アイヌは川に沿って海から山へと人々が行き来したからとのこと。

分水嶺で踏査したクオベツは弓 (毒矢) を仕掛けた危険な所という意味があるそうです。奥行きが深いですね。(み)

寄稿 泡瀬干潟を守って 水野 隆夫

36年間、国立公園レンジャーとして日本列島南北3000kmを1往復半する幸せな渡り鳥人生を送り、この3月末で定年退職ですが、そのスタートは青森県でした。ある日、気になる投書と出会いました。多くの渡り鳥たちが群れ飛ぶ下北半島六ヶ所村の美しい湖沼群が巨大開発で破壊されることを心配している内容でした。

その後、私はこの自然の素晴らしさを多くの人に見せるのが一番と友人と二人でバスを2台、貸し切り、観察会を主催しました。当時、開発推進派が立てた看板の一文を思い出します。「死膳では食えない。」自然を守っても生活できないという意味ですが、あれから30数年後の開発地は最も危険な原発のゴミの最終処分場となり湖沼群も荒れ果てています。もし自然を保護していれば、水鳥と湖沼群は魅力的な地域の宝になり、今の釧路湿原国立公園のように地域が見事に活性化していたと思うと残念でなりません。

「自然では食えないのではなく、自然を守らないと食えないのです。」賢明に自然を活用するのが21世紀の人類の知恵です。ここで、浮かぶのが沖縄市の泡瀬干潟の埋め立てです。あの干潟は永く、地域の人たちの日常的な潮干狩りや浜下りなどに、親しまれてきただけで末永く子孫に残す価値がありますが、そのうえ、泡瀬の干潟は貴重な生き物の宝庫です。実現する当てもない絵に描いた餅のような土地利用計画に国、県、市で約600億円もかけ、この地域の宝、いや、世界の宝、世界遺産にもなれるような海を埋め立てていい正当な理由があるとはとても思えません。泡瀬干潟の素晴らしさを多くの人に見せ本当にこのまま埋め立てていい海か考えてもらうことが今、一番大切だと思います。

お知らせです。4月10日「泡瀬干潟を守る人の集い。」米軍通信基地南の浜 12時から夕方5時頃まで。観察会、集い、コンサートなど 問い合わせ090-5476-6628 泡瀬干潟を守る連絡会

もっと多くの人に泡瀬干潟のことを知ってもらうため「泡瀬干潟大好きクラブ」が4月から誕生します。泡瀬干潟に関心がある方は、水野へお便り下さい。資料を送ります。〒905-0428沖縄県今帰仁村今泊479 Eメール mahodori@zero.ad.jp



鮭はダムに殺された」二風谷ダムとユーラップ川からの警鐘

稗田一俊著 岩波新書 1900円+税

28年間、遊楽部川でサケの撮影をしてきた著者は、各地のダムがいかにも自然を破壊し、洪水にもならぬ効果がないことを検証し警鐘を鳴らして

2003年8月、ダム決壊を警告するサイレンが二風谷の住民を震え上がらせました。その時、現場にいた著者は、流入する水量と放出する水量の膨大な量に疑問を感じた。流れ込んだ土砂が堆積し河床低下した下流で、水被害を拡大させたのではないかと日頃から感じていた、その疑問を解決するため、各地の自然保護活動家や研究者と共に北海道の川の現在を徹底的に調査し、ダムが引き起こしている問題を目の当りにする。ダムが造られたら、サケの産卵場の石が流される。その分量を補う石が上流から流れて来なくなるから、川底が下がり、サケの産卵場も変化し、川底が極端に掘り込まれるので、川岸の崩壊を招くことになる。そうするとコンクリート護岸に置き換え



られ、サケやサクラマス、イトウ、ウグイなど多くの魚たちの産卵する河床が床固工の敷設によりどんどん失われていくのです。たくさんの現場を見て、ダムは「自作自演の災害」だと訴えています。

生命育む川の仕組みのイラストが楽しくわかりやすい。サケのメスは湧き水があるところを探し当て川底の砂利をはじき飛ばしてくぼみを作って産卵する。川底の下で、暖かい湧き水に包まれてサケの小さな命が育っていく。まるで、稗田さんがサケの目になって伝えていて感動します。サクラマスが生息するサンル川にダムはいらない。大きな声にしていかなくてはと改めて思いました。

「黙って行かせて」ヘルガ・シュナイダー著

高島市子・足立ラーベ加代訳 新潮社 1600円+税



著者の母は元ナチス親衛隊員でアウシュビッツ収容所の看守だった。著者はオーストリア出身のイタリアの作家です。弟が1歳7ヶ月、著者が4歳の時、家族を捨てて母はアウシュビッツに行ってしまった。そこでユダヤ人大量殺戮の実行組織の一員として模範的な看守として勤め上げた母。良心の呵責はなかったのだろうか？父の再婚、母のソ連への抑留などで関係は途絶えていたのが、1971年に30年ぶりで再会。98年にもう一度、老人ホームで再会した。この二度の再会で確かめたこと、特に最後の対面で著者が聞きだしたことが本書です。

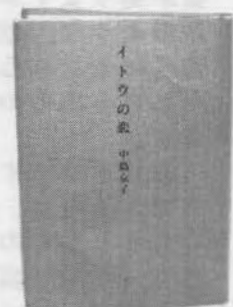
悲しいまでに母のナチスへの狂信ぶりがあらわになります。母を問い詰める娘は

少しもあいまいにしない。「あたしはユダヤ人の女たちを憎んだの。ほとんど生理的な嫌悪感を彼女らに対して抱いたのよ。あのいやな人種、連中の団結の強さといったら！」ガスが短縮されたっていうのはほんとうのこと？「まあそうね。日に一万二千個も処理しなければならないの」少しも罪の意識がないとはどういうこと？と全身が凍りつくようなショックを覚えました。母の言葉は、確信に満ちていて、本当にこんな事実があったことを本人の口から引き出したこと、著者は胸ひきさかれる思いで書きたらと真実とはなんと残酷なんだろうと思いました。ホロコーストが何であったか深く追求する足がかりになる本です。

バレーボールの監督として活躍するアリー・セリンジャーはポーランドの強制収容所でアンネ・フランクと一緒にいたという記事を読みました。生涯口にすまいと決めていたが、最愛の妻を今年失い、記憶の底に閉じ込めていた残酷な体験を後世に伝えようと決断させたという。生きている人からの貴重な証言をたくさん聴きたいと思います。

「イトウの恋」 中島京子著 講談社1600円+税

イギリスの女性探検家イザベラ・バードと彼女と共に日本奥地を旅した通訳のイトウ。明治時代に実在したふたりと、イザベラ・バードの著書「日本奥地紀行」に想を得た小説です。中学の社会科教師、久保耕平は、実家の屋根裏部屋から、イトウの手記を見つけます。ぷつりととぎれた手記のつづきを探してイトウの係累縁者を探し出します。劇作家の女性、田中シゲルとの出会い。まるでかみ合わなかった二人が、イトウと呼ばれるように距離を縮めて行く過程がいいのです。イトウの恋が交互に語られ、時空を超えて、旅する気分になりました。イザベラ・バードとの出会いは、イトウにとっては人生を変えるほどの夢の時間でした。シゲルが曾祖父の手記探しに知らず知らずのうちにのめりこんでいくのと同様にいつの間にかイトウの恋の行方に期待している自分がいました。イザベラ・バードがとて身近に思えました。こんな小説、私は好きです。



元気で活躍されていた三浦國彦さんがなくなって6年。まだ61歳の若さでした。

子どもたちの自然環境教育に情熱を注いだ三浦先生をしのんで、たくさんの方が文章を寄せて下さりました。

私も編集委員のひとりとして原稿のお願いをしました。小野有五さんは「本物のアーシアン」と題してアーシアン（地球人）という言葉を作り出した三浦さんは本物のアーシアンであったと讃え自然保護とは実は「人間の保護」であり、「地球に優しい」とはほんとうは「人間に優しい」ことでなければならないと見抜いておられたのも三浦さんでしたと記しています。

（クラブ旭川）を巣立っていった子どもたち、父母、さまざまな人たちが三浦先生の魅力を語っています。ECAのコーナーに寺山和幸さんはECAの1年間の活動をみて感じたことは、子どもたちの表情がとても魅力的なこと。自然遊泳の楽しさや雰囲気カメラが自然にとらえていると記しています。多くの方が書いていますが、教育実践、写真、ビデオ撮影、音楽（ピアノも歌も）文才と多芸多才な先生でした。

自然保護の運動に行き詰った時、先生が生きてらしたらどうされるだろうかといつも自問します。私の悪筆を評して「みなちゃんはいつも急いでいる、走りながら考えている」と言いましたね。年をとったせいがかつまずいてばかりいますよ。



映画



「微笑みに出逢う街角」

カナダ・イタリア

監督 エドアルド・ポンティ

「ひまわり」の艶やかなソフィア・ローレンの100本目の出演作として話題になりました。カナダのトロントに住む世代の異なる3人の女性が、それぞれに消せない心の痛みを抱えている。

人生を模索しながら、過去と決別して新たな一步を踏み出すまでを描き出して行きます。

オリビア（ソフィア・ローレン）は車椅子の夫の世話を焼きながら、公園でデッサンを続けています。誰にもいえない秘密を抱えていました。若い写真家のナタリア（ミラ・ソルヴィーノ）は戦火のアンゴラで撮った写真がタイム誌の表紙に選ばれますが、少女を救わず撮影したことに苦しみます。チェロ奏者のキャサリン（デボラ・カーラ・アンガー）はコンサートが終わっても娘と夫の待つ家に帰れずにいます。暴力をふるって母を死に至らしめた父が許せない

ふと立ち止まり、これまでの人生を振り返る女性たちの心模様が美しい風景と共に描かれます。家族や仕事、あきらめきれない夢が浮き彫りになるのです。新しい人生を歩み出す3人の輝く笑顔が素敵です。特にソフィア・ローレンは、地味で生活に疲れた主婦から、一步を踏み出したとき、美しく、チャーミングに変身します。本当の自分の幸せを求めて生きる真摯な女性たちに乾杯！

母親大会に全国から6000人



7月22日に茨城県水海道市に住む前島公美さんのお宅にお世話になり、ひたちなか市と筑波での母親大会に参加してきました。23日はアムネスティ・インターナショナルの日本支部で活躍する、イーデス・ハンソンさんの記念講演を聴きました。「人権が守られる状態が平和だと思う」と、もしもその人の立場だったらと考える想像力が必要だと思う、人権を守るには、人はそれぞれに違うという事を知って欲しいと自分の家庭生活での例をあげて話しました。ハンソンさんのところは夫が食事を作り、彼女が掃除と、得意な分野で、分担して「いろいろあっていいやん」と笑わせました。

24日の分科会は、前島さん、阿部さんらと筑波大学に出かけました。51の分科会があるので大変！私は「きくちゆみさんと一緒に語る平塚らいてう」参加しました。

きくちゆみさんは自然保護や平和活動にインターネットを活用して頑張っています。特に印象的なことばは「毎日の暮らしの中で戦争に加担しない生き方をしたい」と石油エネルギーをたくさん使わず、自分の食べるものは、自分たちで作る生活をしていると語ったことでした。

平塚らいてうも平和のために、果敢に行動した女性でした。時代を超えて二人の共通点がよく分かり、共感しました。（詳しい記事は次号に）

お便り

■みなさんの限りなく成長していく山行の様子を読ませて頂いて、リアルな記録に、あー私もいきたいなんて楽しみに読ませて貰っています。私たち夫婦も毎日のように森林公園に行っています。今日は瑞穂の池にカルガモ夫婦と青サギがいました。

今、植物の生態を学ぼうと木の葉っぱや花の付き方など忙しく観察しています。これから山も良い季節ですね。日高の山にこだわった神原さんの生き方も素敵ですね。私も身近なところから環境保護をしていく活動をしていきたいと思っていますので、事前に何かニュースでもあれば教えてください。ではまた元気で活躍ください。(江別市 T. Kさん)

■こんにちは。いつも「銀河通信」お届けくださり有難うございます。

中央分水嶺踏査 大変でしたね・よくがんばっているな・と敬服していました。

頑張る意志の強さは やっぱりみな子さんは並ではない、と思いました。

そんな みな子さんが好きですよ！これからも さりげなく 自分を表現していけると良いですね・また一緒にできます事を楽しみにしています。(札幌市 Y. Sさん)

■いつも愛読して感心しています。本、映画の紹介も参考にしています。「エレニの旅」も是非見たかったのですが、3時間の長時間、腰の不安がありあきらめました。ただ櫻井よしこ氏はH I Vや日中問題の発言などで気になる点が多々あります。(札幌市 F. Mさん)

・・・週刊金曜日でも批判してました。自伝は面白いけどタカ派的な発言には私も賛成しかねます。今後気をつけます。(み)

■山あり、映画あり、本ありと文化の香りいっぱいの紙面で特に憧れを誘うのは山行の記事。忙しくてなかなか山に行けない私は羨ましいい思いで楽しませてもらっています。特に今回の分水嶺踏査は大挑戦でしたね。(札幌市 K. Rさん)

■小野有五先生のごことがよくわかって楽しみです。苫小牧の千歳川放水路や、I T E R 反対運動などでお世話をかけていましたが背景(お父さま、お母さまのことなど)知りませんでしたので、やはりそれだけの原体験があったわけですね。静かでそれでいて強くて、素晴らしい科学者ですね。映画も私は市民映画館シネマトーラスと一緒に色々しているので本当に共通部分が多いですね。(苫小牧市 T. Yさん)

■ご無沙汰しています。いつも、銀河通信をありがとうございます。毎回、楽しみにしております！11月に利尻に引越したのも束の間、4月に結婚しまして帯広に移り住んできました。毎日、日高山脈や大雪山系をながめ、畑の草取りをし作物ができるのを楽しみに暮らしています。自給自足とまではいきませんが、限りなくそんな生活に近づけたらと思っていますがこちらにいらっしゃることがありましたら、ぜひお立ち寄りください！(帯広市 S. Tさん)

■長い学生生活が終わり、知床ウトロで自然ガイドとして働き始めて早1ヶ月が経ちました。アイヌ民族のミュージシャンOKIが全道ツアーをすることになりました。OKIは伝統ある弦楽器トンコリの第一人者であり、現代的なレゲエなどを取り入れて、新しいアイヌ伝統音楽の創造に取り組む新進気鋭のミュージシャンです。どうぞ、お近くの会場に足をお運びください。

知床は最高です。是非、来てくださいね。(NPO法人SHINRA西原重雄さん) <http://www.shinra.or.jp> をご覧ください

■いつも銀河通信をありがとう。三浦先生の思い出のご本いただきました。編集も心がこもっていて思わず懐かしい写真に見入ってしまいます、先生の遺志を微力でもついでいこうと思いました。(熊谷市 S. Yさん)



購読料をありがとう 2005. 5. 25~7. 13 (敬称は略します)

菅沼宏之(札幌市)、小栗宏(歌登町)、宮津公一(品川区)、土本武司(札幌市)、中村綾子(熊本市)、山城えりこ(旭川市)、長谷川雄助(札幌市)、江部靖雄(札幌市)、五十嵐憲子(江別市)、久能由弥(江別市)、泉加澄(札幌市)、佐藤通晃(倶知安町)、北芝梅子(京都市)

購読料とカンパとが判然としない金額が振込まれています。3,000円以上の方は次のとおりです。たくさんのカンパをしてくださった方に感謝いたします。

木村玲子(札幌市)、袖山道夫(旭川市)、中川路朋子(江別市)、福原正和(札幌市)、坂口一弘(函館市)

総計45,000円でした。また、佐藤守さん(札幌市)から60円、40円、20円、10円の記念切手35,200円分を頂きましたが、これは送料に使わせていただきます。ありがとうございます。